

Lerner スケール日本版開発のために

—初心者によるマニュアルの利用結果等—

中西公一郎 教育科学講座
 浅津由美子 須坂市役所
 石井雄吉 明星大学
 池田綾香 教育カウンセリング課程
 平山司 教育カウンセリング課程

1 はじめに

防衛機制は、「不安、および内的または外的危険またはストレス因子に気づくことから個人を守っている自動的な心理過程である。個人は、こうした過程が働いているときにそれに気づいていないことが多い。防衛機制は、情緒的葛藤、および内的および外的ストレス因子に対する個人の反応を調整する（APA, 1994）」。

最近の防衛機制の概念については、中西（1999）が紹介している。

防衛機制の測定においては評定者間信頼性が問題となる。その問題を避けるための5種類の代表的な測定方法と最近の日本での防衛機制測定研究については、中西（2002）が紹介している。その5種類の測定方法のひとつに Lerner Defense Scale (Lerner & Lerner, 1980) がある。Lerner Defense Scale は投影法であるロールシャッハ・テストを利用し、評定者間信頼性を高めるための工夫がなされた判定方法であり、石井ら（1994）により和訳されている（以下 Lerner スケール）。酒井ら（2000）は、3名の評定者が Lerner スケールを用いて10名分の判定に行った際の評定者間信頼性を報告しており、結果は分裂 1.00、価値下げ 0.96、理想化 0.87、否認 1.00、投影性同一視 1.00 であった。しかしながら実際の評定においては、判断が困難なものがあったり、日米の文化差によって判定例が日本の実情に合っていなかったりするという問題があった。そこで Lerner スケールの日本版開発が望まれる。本論文の目的は、現在の Lerner スケールの問題点について明らかにすることであり、予備研究として初心者による Lerner スケールの利用結果も紹介する。

2 方法

Lerner スケールを使用することがない信州大学学部生3名（4年生1名、3年生2名）が、Lerner スケールを利用して38名分のロールシャッハ・テストの評定を行った。38名は、病院において検査を受けた者と大学の授業の一環として検査を受けた者であり、年齢・性別など様々であった。評定者の内、3年生2名はロールシャッハ・テストについても十分な知識を持っていない状態で本研究に参加した。各自が、逐語興しされたロールシャッハ・テストを、Lerner スケールの定義や具体例を参考にしながら評定した。

3 結果

Lerner スケールで評定対象となる人間反応は、38名全員の被験者に見られた。38名の人間反応の合計は216であった。防衛機制の種類に関係なく、人間反応全てについての評定者間の一致度は0.22であった。この数字には、誤った評定で一致している場合も含まれるであろう。このように初心者にとって Lerner スケールを用いた防衛機制評定は大変困難であった。

4 考察

評定者間の一致度が低かった一因としては、ロールシャッハ・テストにたいして、3人の評定者の熟練度が低かったことも考えられるが、マニュアルの定義や具体例の不備も関連しているだろう。このようなマニュアルを利用する際に評定者間信頼性を高めるためには、あらかじめ評定者が評定基準の不明確な判定などについて、すり合わせを行うことが必要である。酒井ら（2000）が報告した評定者間信頼性は高かったが、この際にも評定者同士の事前の評定尺度のすり合わせが行われていた。事前のすり合わせや訓練を行わずに、高い評定者間信頼性を得られるようなマニュアルを作成するには、定義や具体例の問題点を改善する必要がある。以下に Lerner スケールの問題点を何点か指摘する。

1. 道化師、妖精、野蛮人、魔女、悪魔、オカルトの人物などが、人間形態の歪みとして価値下げ（devaluation）の対象となっているが、妖精などが本当に価値下げの意味で使われているか不明である（黒人、海賊などにたいする偏見についても文化差や個人差があろう）。
2. 小さな人形、マネキン、ロボット、何らかの人間の特徴をもった創造物（モンスターは含まない）が人間性の次元が失われた歪められた形態として価値下げの対象となっているが、人間反応を対象とした Lerner スケールにおいて、どこまでが人間反応かが明らかでない（例えば仮面は人間反応とみなすかどうかなど）。
3. 「乳房のある女性、ハイヒールの靴、そして、口は鳥のくちばし」という具体例が価値下げの例にあるが、「口の代わりに鳥のくちばしをもつ人」という具体例は低水準の否認の例であり、区別が明確ではない。

これらの問題点の中には価値下げや理想化において、価値観における文化差の問題がある。更に言えば、これらは単なる文化差の問題ではなく、個人差の問題である。一般に一人の被検者は数種類の人間反応を報告するので、ある反応の評定において明確になった防衛機制は、他の反応において厳密に評定される必要はない（例えば価値下げと理想化の両方の防衛機制が評定されていれば、その他の名詞をその個人が価値下げで用いているのか理想化で用いているのかは、判断する必要がない）。しかしながらその評定に厳密性が求められる場合には、そのような個人差を判定するために、どのような方法を用いることが出来るのだろうか。Mori（2003）は、個人の潜在的な差別意識の有無の検証が簡便に大量に行える FUMIE テストを紹介している。評定に厳密性が求められる際には、ロールシャッハ・テストと FUMIE テストの両方を行うことで、価値観における個人差の問題を解消することが出来る。

5 おわりに

ロールシャッハ・テストは病院などで広く使用されている心理検査であり、これを用い評定者間信頼性の高い検査結果を得ることは重要である。そこでアメリカで紹介された Lerner Defense Scale を日本人が更に有効に利用できるような Lerner スケール日本版の開発が望まれる。上記の問題点等を改良し、誤り易い評定例については事前に紹介し注意を促すことで、Lerner スケール日本版の評定者間信頼性は更に高めることが出来るだろう。

*本稿は、浅津由美子（2003）の卒業論文に加筆修正したものである。

参考文献

- American Psychiatric Association (1994): Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders 4th edition (DSM-IV). American Psychiatric Association: Washington DC. (高橋三郎, 大野裕, 染谷俊幸 訳 (1996). DSM-IV 精神疾患の診断・統計マニュアル

ル 医学書院.)

石井雄吉・小阪憲司 1994 Lerner Defense Scale – By Lerner, P. M. & Lerner H. D., 横浜医学, 45, 79-84.

Lerner, P. M., & Lerner, H. D. (1980) : Rorschach assessment of primitive defenses in borderline personality structure. In *Borderline Phenomena and the Rorschach Test*, (eds. J.S. Kwawer, H. D. Lerner, P. M. Lerner, & A. Sugarman), pp.257-274. International Universities Press: New York.

Mori, K. (2003). Development of the FUMIE test for measuring the implicit association of target words to negative emotions. 日本社会心理学会第44回大会.

中西公一郎 (1999). 防衛機制の概念と測定 心理学評論, 42(3), 261-271.

中西公一郎 (2002). 防衛機制の実証的検証 精神科診断学, 13(3), 257-269.

酒井渉・中西公一郎・石井雄吉 2000 防衛機制の測定に関する一研究—防衛スタイル質問紙 DSQ とロールシャッハ・テスト (Lerner Defense Scale による判定) との関連について— 神奈川県精神医学会誌, 50, 27-34.

(2003年5月26日 受理)